＜前回＞フェミニスト神学

「解放の神学」系の中での焦点の一つ。「男―女」というコードをめぐる多様な展開。

（１）フェミニスト神学の背景

０．女性解放の歴史と類型

Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Towards a Feminist Theology*, SCM Press, 1983.

9.The New Earth: Socioeconomic Redemption from Sexism
Liberal Feminism / Social Feminism / Radical Feminism
/ Is there an Integrative Vision of Society?

１．ユング：三位一体の象徴（キリスト教に規定された西洋文化圏における完全な自己の象徴）は完全(vollkommen)であるが、十全(vollständig)ではない。

２．1960 年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この３０年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて､それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越, 1997）。

３．フェミニズムの問題提起　→　フェミニスト神学

フェミニズムの問題意識を共有しつつ、新しいキリスト教の形成を目指す神学運動として展開されている｡そこには､キリスト教の徹底的な否定論から伝統の再生論まで多様な議論が交錯している。

４．争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

「この探求の出発点は、共観福音書のイエスとの出会い、つまり彼について蓄積された教義ではなく、彼のメッセージと実践でなければならない。」（Ruether, 1983,p.135）

５．対照的で代表的な論者として次の二人に注目

デイリ(Mary Daly, 1928-2010)とリューサー(Rosemary Radford Ruether ,1936-)

アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

６．神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ(Daly, 1973)は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する ―― イエスは過去の人物であり、現代人の規範にはなり得ない、そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって､他人を規範とすることはできない ―― 。

７．真の人間、規範的人間としてのイエスの否定であり､イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判。

８．リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して､フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

９．リューサー(Ruether,1983,116-138)。古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立したが､その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。イエスという歴史的人物が男性であったことと､神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生。女性原理が神象徴の中から排除される。

10．イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という 400 年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

11．イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうる

キリスト論)。フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方で生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

12. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

14.「支配－従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。

12. フェミニスト神学の二つの選択、キリスト教の外へ、あるいはキリスト教の内部で

デイリー　　リューサー

（２）フェミニスト神学の展開＝可能性

１．エコフェミニスト神学

Rosemary Radford Ruether, "Ecofeminism: The Challenge to Theology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether（eds.）, *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000. pp. 97-112.

エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化―象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）よって与えられるという連関である。

２．エコロジカルな意識として生じた徹底化の文脈にフェミニスト神学を組み込むこと。

1)自己論（人間理解）

・プラトニズム的な心身二元論への挑戦

反省的自己意識とは分離可能な存在論的実体ではなく、脳―身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質―エネルギーの奇蹟・神秘にある。

宇宙プロセスの全体を祝福し、我々の生命を地球共同体全体の生命と調和させることが必要である。これは、相互限定と交互的な生付与的はぐくみの霊性と倫理を要求する。

2)悪と救済

悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。

・悪は常に我々と共にある。

罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。

女性・身体・地球の支配とそれからの逃亡＝自らの否定された有限性の克服とそれからの逃亡。これが、歪曲のシステムを生み出す。支配と歪みのシステムが罪である。

救済とは、歪みのシステムを廃棄することにであって、そうすることによって、相互に命を与え合う共同性を期待できるようになる。

誤った逃亡主義から解放された終末的希望のヴィジョン。様々な悲劇の只中で豊かな喜びを共に享受すること、限界や過ちや事故をも等しく分かち合うこと。

３．女性の経験から女性たちの経験へ

多様な文脈へ、ラテンアメリカのフェミニスト神学、ウーマニスト神学、アジアのフェミニスト神学
４．第一世代から次の世代へ
５．フェミニスト神学から多様な「性」の神学へ
　クイア理論　→　クィア神学

５．　黒人神学

（１）解放の神学とその多様性

１．Christopher Rowland（ed.）, The Cambridge Companion to Liberation Theology, Cambridge University Press, 2007（1999）.
２．ラテン・アメリカの政治的解放の神学（カトリック教会）、フェミニスト神学、黒人神学、アジアの解放の神学（民衆の神学など）。
解放の神学の多様性は、現代における「罪＝抑圧」現象の多様性に対応している。
民族・人種、政治・経済、ジェンダー・文化
「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由の身分もなく、男も女もありません。」（ガラテヤ 3:28）

（２）黒人神学と社会的構想力

３．黒人神学
「「キリスト教国アメリカ」の病根、人種差別という悪に、教会人が初めて踏み込んだのは、六〇年代後半、ブラックパワーと黒人意識の高まりという政治文化的な大衆運動を背景にしてのことだった。黒人神学という言葉を最初に掲げた神学書は、六九年、当時まったく無名だったコーンの書いた『黒人神学とブラックパワー』（邦題『イエスと黒人革命』新教出版社、七一年）だった。キリスト教の使命は「神の顕現を、虐げられた者の実存的情況に照らして解明し、解放の力を、福音の中心たるイエス・キリストに結び合わせることである」。ブラックパワーに触発された若きコーンはそう宣言して、黒人解放こそ現代のイエスのわざに他ならないと言い切った。二十世紀後半のアメリカ神学を綴るとき、ジェイムズ・コーンを抜きにして語ることは到底できない。」（栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社、76-77 頁）

４．コーン『抑圧された者の神』新教出版社。

はじめに

「私は黒人神学の知的基盤を論じ、被抑圧者に対する神の解放に終始しないような、いかなる福音分析も「それ自身」非キリスト教的であることを、神学的に明らかにしようと努めてきた。」(1)
「ここではただ、そもそも神学者たちが自らの状況の諸限界を忘れて、自分たちはあらゆる所であらゆる人々のために語っているのだと思い上がる時にだけ、彼らの神学はイデオロギーと化し、したがって抑圧的・帝国主義的になるのだ、ということを指摘すれば十分であろう。欧米神学の多くは、たといそれが解放や自由について語っている場合でも、そのような性格を帯びている。」(6)
「すべての神学は特殊的なものであり、したがって、その特殊性によって限界づけられているが、所与の特殊性が指示している真理は限界づけられていない。」
「解放という黒人神学の主題に耳を傾けることは、われわれの連関の中で自由の真理のために闘うということである。私が黒人性の具体性を強調するのは、その特殊性こそが、私

の社会的・政治的連関の中で抑圧とは何であり、解放とは何であるかを、最もよく説明しているからである。」(7)

I 序論

「黒人の宗教と白人の宗教は本質的に同じものである。なぜなら、白人が黒人に「キリスト教」を紹介したのだから、というように仮定することは、もちろんの可能である。しかしながら、そのような仮定は、神学者から黒人の宗教的思考様式に対する生き生きとした洞察を剥奪してしまうことになるであろう。なぜならば、そのような仕方では、思考と社会的実存との間にある重要な関係を認識することができないからである。」(32)

「私の論点は、われわれの社会的・歴史的文脈は、ただわれわれが神に語りかける問いだけでなく、その問いに対して与えられる答えの態様ないし形式をも決定する、ということである。」(39)

II　真理を語る

「黒人経験の神学的機能を探究すること」

神学の資料としての黒人経験

「黒人神学は、黒人経験の構造と形式を明らかにしなければならない。なぜならば、解釈の諸範疇は、黒人経験それ自体の思考形式から生起してくるものであるからである。」(42)

「それは教会的経験と同じ歴史的共同体から創出されたものであり、したがって、自らの夢と大望に基づいて生を形成し、かつ生きようとする、人々の試みを表現しているからである。このような黒人的経験に含まれるものは、動物物語、民話、奴隷の俗歌、ブルース、個人的経験の記録等である。」(51)

「黒人経験についてのもう一つの重要な神学的資料は、奴隷および元奴隷の物語、すなわち、黒人の勝利と敗北の個人的記録である」、「もっと最近の黒人文学」「ハーレム・ルネッサンス(一九二〇年代および三〇年代」の詩人たち、およびその後継者たち」「自由への闘いを指摘ヴィジョンで表現した。」(56)

「われわれ黒人神学者たちは、真理を「語る」ためには、黒人性についての真正の経験を提示しなければならない。」(60)

黒人経験・聖書・イエス・キリスト

「黒人神学の資料としての黒人経験は、伝統的なキリスト教神学の資料として同定されている聖書に対して、どのように関係づけられるのであろうか」(60)

「彼らは単に自分自身のことだけを取り扱っているのではないということである。彼らはもう一つの別の現実について語っているのである」、「黒人神学を単に黒人の文化史に解消してしまうことを防いでいるのは、この超越性の肯定なのである。黒人にとって、超越的現実とは、聖書が語っているイエス・キリストにほかならない。聖書は、イエス・キリストにおける神の自己啓示の証言である。かくして、黒人経験は聖書が黒人神学の一資料であることを要求しているのである。なぜなら、まさに聖書こそが、奴隷たちに、奴隷主たちのそれとは根本的に異なる神観を肯定することを可能ならしめたからである。」(61)

「イエス・キリストの証言としての聖書の重要性はだからといって、黒人神学が西欧キリスト教の伝統と歴史を無視してよい、ということを意味するものではない。それはただ、その伝統についてのわれわれの研究は、黒人によって解釈されたような仕方での、聖書に啓示されたみ言葉の理解の光に照らして遂行されなければならない、ということを意味し

ているのである。」（62）
「われわれは初代の教会教父たちを、彼らがわれわれの現代的状況の危急的問いを提示していないという理由で批判することはできない」、「だが他方において、われわれに過去の信仰解釈者たちを評価することを可能ならしめる、人間経験における共通要素というものも存在する。」（62-63）
「神学の主題とは、神学的言説の厳密な性格を造り出し、そのことによって、神学的言説を他の言説から区別するところのものである。それとは対照的に、神学の資料とは、神学の主題を正しく表現せしめうる材料のことである。イエス・キリストは、黒人の希望と夢の内容であるゆえに、黒人神学の主題である。」（63）
「黒人性と神性とは、一つの現実性として弁証法的に結合されるのである。」（68）
「イエスを被抑圧者の解放者として見ることをしない、いかなる時代の福音解釈も異端的である。」（70）

V　黒人神学とイデオロギー

「神学者たちが問わなければならない問いは、彼らの神学が社会的利害によって規定されているか否か、の問題ではなく、むしろ、「誰の」社会的利害、抑圧者か、それとも被抑圧者なのか、という問題である、聖書的立脚点からして、単に、イデオロギーとは神のみ言葉の、あるいは社会集団の願望との同一視である、というだけでは、間違いである」、「貧しき者の歴史的意識から生起してこない神学は、イデオロギーなのである。」（145）
「特定な白人神学者の悪しき意図のせいであるよりも、彼らの思考がそこに生起する、社会的連関によるものである。」（147）
「キリスト教神学者とは、それゆえ、社会的実存と神的啓示との微妙な均衡関係に固着しつつ、福音解釈へのその解釈学的意識が、被抑圧者の自由の闘いによって、規定されている人のことである。」（148）
「解放の物語と神の物語との同一視は、人間的状況から引き出したものではない。キリスト教神学は、人間的必要性から神へと進行するのではなく、神の啓示からわれわれの必要性へと進行する。」（150）
「このような批判的問いについての決定は、彼らの自由への闘いの根源でありたもうお方の、出来事を通しての臨在に出会う際の、解放の闘いの中にある人々にこそ、委ねなければならない。」（152）
「真の検証は、われわれが、自由のための歴史的闘争において、同じ側につくように導かれるか否かに、かかっている。」（153）
「「客観的に証明する」方法は何もない」（153）
「だが、このような譲歩は、無制限的な相対性を肯定するものではない」、「超主観的な「何事か」は、物語において言い表わされるし、事実、物語において具体化されているのである。」（154）
「すべての民族は、語るべき物語、すなわち、彼らが自分の存在理由を規定し、かつ肯定する際に、自分自身と子孫たちと世界に向かって、自分たちがいかに考え、いかに生きているかについて、語るべきなにかを持っている。物語は、無から有へ、非存在から存在へと移行する、奇跡を言い表わし、かつそれに参与するものである。」（154）
「われわれは、聖書物語は、われわれの主観的状態から独立している、それ自身の完全性と真理を持っている、と仮定しなければならない。われわれは、何でもかんでも、聖書物語の中に読みこむ自由を持ってはいないのである」、「彼の物語は、われらと共にいたもう、彼の臨在の恵みによって可能とされる信仰を通して、われわれの物語となるのである。」

(156)
「彼らが述べた言葉を、真剣に聞くことによって、われわれは、われわれの現在の主観性から導き出されるのである」、「われわれ自身の時代と状況の外にいる、他者に耳を傾けることによって」(157)
「われわれ自身の物語がイデオロギー的になる、つまり、真理を聞くことを不可能にする閉じられた体系になるのは、われわれが、他の物語を聞かなくなった時である。」(158)

５．コーンの黒人神学における社会的構想力の問題
　　イデオロギー批判：福音の解放性・真理の歪曲、普遍性の偽装
　　「人種問題に関する社会分析の導入」(栗林、78)
　　物語の特殊性（自己同一性としてのイデオロギー）
　　とその複数性（他者への開放性）
６．社会的構想力：経験と聖書との間（二つの地平）
　　芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平の交わるところ』
　　三恵社　2016 年。
　　経験：個人と共同体　→　特殊と普遍
　　物語：解放、解放する真理、解放の物語　→　ユートピア
　　聖書：夢の素材そして規範、聖書を通した他者の物語への開放性
　　↓
　人間的現実性を構成する虚構の働き
　　小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。
７．キリスト教神学（思想）の解釈学的構造：
　　聖書的地平と思想主体の歴史的地平、問いと答え。

（３）黒人神学の展開
８．コーン（ヴァージニア・ファヴェリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局）
「ジェームズ・コーンが *A Black Theology of Liberation*〔訳注：『解放の神学――黒人神学の展開』梶原寿訳、新教出版社、1973 年〕を出版したのは、1970 年、*God of the Oppressed*〔訳注：『抑圧された者の神』梶原寿訳、新教出版社、1976 年〕は 1975 年に出版された合衆国の重要な黒人神学者としては、他にドーティス・ロバーツ(J. Deotis Roberts)とゲイロード・Ｓ．ウィルモア(Gayraud S. Wilomore)がいる。
1980 年代から 1990 年代にかけて、黒人の神学は主に三つの方向に展開した。すなわち、ウーマニスト神学の勃興、聖書研究における新しい声の発現、そしてアフリカ人奴隷の宗教への回帰である。」(コーン、191)

９．コーン（現在、ユニオン神学校、組織神学教授）とコーン以降
「コーンの次の世代で、特異な存在感のあるコーネル・ウェスト」「現代アメリカ黒人知識人の最先端」、「鬼才」(栗林、78-79)
「二〇〇二年」「アメリカ・アカデミズムの最大のゴシップ」、ハーヴァード大学からプリンストン大学への移籍。現代哲学の諸潮流＋バプテスト系の黒人神学者。
「第三世代」「ジェームズ・Ｈ・エヴァンズ」(85)

10．Ｃ・ウェスト『民主主義の問題』(原著、2004 年)

・「民主主義は恐ろしい状況に陥っている」
「民主主義にとって最大の脅威は、支配的な影響力を持つ三つの反民主主義的な教義・ドグマという形で台頭」
「自由市場原理主義」「市場を偶像と物神にしている」
「攻撃軍事姿勢」「潜在的な敵に対する先制攻撃」
「権威主義」「愛国者法」「市場に動かされるメディア」
↓
「アメリカの未曾有のギャング化」
「アメリカには」「民主主義を勝ち取り、取り戻すためのエネルギーは残っているのだろうか」（11）
「九・一一の醜悪なできごとは、アメリカ人が自己検証をする機会になるはずだった」（15）
「非民主主義的で非人間的な白人優越主義の欺瞞への批判」
「偶然の条件から生まれたアメリカの民主主義と、帝国アメリカに不名誉な始まりは連動している」（17）
・「民主主義へに対する人びとの深い敬意」「愛」「三つの重要な伝統」（19）
「ソクラテスのように問い続けることに献身すること」（みずから、権威やドグマ、偏狭さや原理主義）
「ユダヤ教が産み出した預言者による、すべての民族にとっての正義への献身」
「希望に悲喜劇的に献身すること」「ブルース」「ジャズ」
・「アメリカにおけるニヒリズム」
「希望や愛の途方のない崩壊」「市場の力や市場道徳が黒人の生活の隅々にまで染みこんでいること、黒人の指導者が危機的な状態にあること」（30）
「精神的な落ちこみ、自分には価値がないという思い、および社会的な絶望はアメリカ全体に蔓延している」（31）
「一般に人びとがアメリカの民主主義体制に幻滅しているのも無理はない」
「エヴァンジェリカル・ニヒリズム」「温情主義的ニヒリズム」「感傷主義的ニヒリズム」
・「マーティン・ルーサー・キング牧師」「彼がこの世を去ってから、もっぱら人種の論理による要求によって市民生活が保守的に再編されるのを目にしてきた」、「アメリカの政策の南部化、アメリカの学校や教会、地域コミニュティでの事実上の人種隔離」（64）
「黒人コミュニティも、上流・中流階級対弱体化したスラム・コミュニティに二極化して、ますます分断が進んでいる」、「政治文化の空洞化をさらに後押ししているのが、宗教右派の台頭」（72）
・「四人の傑出した人物」「ロールズ、ローティ、ハワーワス、ミルバンク」「の誰もが、教えるべき多くのものを持っているし、四人とも多くの点で世のためになる力である。けれども、彼らは、預言的キリスト教徒による社会運動という遺産の上に築かれた、確固たる民主主義的キリスト教のアイデンティティを排除している」（176）
「アメリカ帝国の時代において預言的で民主主義的なキリスト教アイデンティティを再生させるために必要なのは、このようなヴィジョンと勇気なのだ」（186）
・「もしかりにわれわれが民主主義をめぐるこの尊い試みに失敗したとしても、言わば、エラ・フィッツジェラルドやモハメド・アリのようにスイングしながら倒れるだろう」（238）

11.「第一世界における第三世界の神学」（ヴァージニア・ファヴェリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局）
「アメリカ合衆国では、大きく分けて四つの人種的民族的マイノリティ集団が存在して

おり、それぞれが神学を行っている。アメリカ先住民、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニック系アメリカ人、そしてアジア系アメリカ人である。」（コーン、185）
・アジア系アメリカ人
・アメリカ合衆国における黒人神学
・アメリカ先住民
・ヒスパニック
・イギリスにおける黒人の解放の神学

「第三世界神学者エキュメニカル協会」「第三世界におけるフェミニスト神学」「第三世界の女性の神学」

12．ウーマニスト神学
「黒人男性の解放の神学にはアフリカ系アメリカ人女性の姿が見えないため、黒人女性は沈黙を破って「ウーマニスト神学」を語り始めた。「ウーマニスト」という言葉は、アリス・ウォーカー（Alice Walker）の *In Search of Our Mothers' Gardens*（1983）」「から採られたもので、彼女はこの言葉を、「男性女性を問わず民族全体の生存と充実に身を捧げる」「黒人フェミニスト」と定義している。」（コーン、191）
「デローレス・ウィリアムズ（Delores Williams）、ジャクリーン・グラント（Jacquelyn Grant）、ケリー・ブラウン・ダグラス（Kelly Brown Douglas）、ケイティー・G．キャノン（Katie G. Cannon）」
Unlike feminism, womanism is not overarching paradigm that all women must ascribe to but a guide to self-definition and self-determination to which a Black woman chooses to adhere. Womanism is not a form of revolutionary asceticism, nor does it impose intellectual or moral superiority, but it is a means of putting Black women in contact with a more subjective, communal, redemptive, and critical means of dealing with her reality, within both the African American community and America at large.（Stacey M. Floyd-Thomas, "Womanist Theology," in: Stacey M. Floyd-Thomas and Anthony B. Pinn（eds.）, *Liberation Theologies in the United States. An Introduction*, New York University Press, 2010, p.45）

（4）近代の問い直し＝奴隷制とコロニアリズムの近代
13．近代とは何か
近代という時代区分を考える際に重要になるメルクマールとして、近代というシステムを構成する諸サブシステムに注目。近代的システムの生成に対して、キリスト教、とくにプロテスタント・キリスト教が決定的な寄与を行ったことについては、様々な議論が存在する。マックス・ウェーバーは、プロテスタント（カルヴィニズム）の禁欲的エートスと資本主義の精神との関係を指摘し（ウェーバー・テーゼ）、リンゼイは、ピューリタンの教会会議の経験と議会制民主主義との積極的関わりを論じている（リンゼイ・テーゼ）。そして、マートンは、ピューリタンの科学者が近代科学の成立に重要な寄与をなしたと論じた。
↓
これらのサブシステムの最初の生成の現場であるイギリス。17 世紀から 18 世紀にかけての時期が、これらのサブシステムの成立期であって――もちろん、厳密にはサブシステムの生成は連動しつつも同時ではない――、トレルチの言う古から新へのプロテスタンティズムの転換は、まさにこの時期に重なっている。
14．テオドール・ウォーカーの場合。

ウォーカー：大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール――「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」――であることを、黒人神学（Black Theology）の立場から主張。

cf.「近代は、17 世紀のガリレオ的デカルト的ベーコン的ニュートン的科学から発展した世界観（worldview）である」（Walker, 2004, 3）というグリフィンらのポスト近代神学の提唱者たち――構成主義的タイプのポスト近代神学（the constructive type of postmodern theology）――に共有された見解。近代をこのように理解する場合、ポスト近代を主張することは、近代的世界観が生み出した破壊的側面を乗り越えることを意味する。

「近代世界を乗り越えて進むことは、近代の個人主義、人間中心主義、家父長制、機械化、経済主義、消費主義、ナショナリズム、そして軍国主義を超越することを含意するであろう」（ibid., 4）。もちろん、こうした近代理解が一定の真理契機を有していることをウォーカーは否定しない――「近代性のしるし、つまり、科学と奴隷制、あるいはより正確には、近代科学と大西洋横断的な奴隷制」について、「黒人的な大西洋的思想は、科学と奴隷制の双方を認識している」（ibid., 16）――。

15．ウォーカー：近代の決定的メルクマール＝近代奴隷制。なぜなら、人間と土地を商品化（commodification）する制度は、近代的な人間関係の理解にとって本質的なものであり、近代的なアイデンティティに決定的な影響を与えているからである。

「アフリカ的アイデンティティは植民地主義と大西洋横断的奴隷制の後に生じた」、「同じことは他の近代的なアイデンティティにも妥当する。これらの他のアイデンティティには、ヨーロッパ的、ヨーロッパーアメリカ的、白人的、黒人的、肌の赤い、アメリカ・インディアンの、そしてネイティブ・アメリカンのアイデンティティが含まれる。これらの色でコード化され土地に定位した語彙、そしてそれ関連した諸理論は、大西洋横断的な発見、征服、奴隷、植民地主義に対する応答の中で溶け合っている。」（ibid., 11）

↓

大西洋横断的な近代的奴隷制度に近代のメルクマールを求めるならば、近代は 17 世紀から 18 世紀の近代科学の形成期から遡ること数百年前の 15 世紀にその出発点を見いださねばならなくなる。

なぜなら、「1444 年 8 月 8 日、ポルトガルによってアフリカから 235 人の商品化された人間の売買が積み荷として船積みされた」（ibid., 15）から。また、この場合、「近代主義の克服とは、奴隷商人、奴隷保有者、そして近代的な経済的社会的関係から利益を得た他の人々によって共有された世界観の克服を意味する」（ibid., 10）。

そして、奴隷制は古代ギリシャやローマの遺産とも言える側面を有しつつも、「近代的奴隷制は、キリスト教徒によって生み出され継続された」（ibid., 21）ことは、この近代をキリスト教との関わりでいかに理解するのかという問題と無関係ではないのである。

＜参考文献＞

１．Anthony B. Bradley, Liberating Black Theology. The Bible and the Black Experience in America, Crossway, 2010.
２．Dwaight N. Hopkins and Edward P. Antonio（eds.）, *The Cambridge Compaion to Black Theology*, Cambridge University Press, 2012.
３．Anthony G. Reddie, *Black Theology*, SCW Press, 2012.
４．James H. Cone, God of the Oppressed, The Seabury Press, 1975.（コーン『抑圧された者の神』新教出版社。）

５．Ｊ・コーン『黒人霊歌とブルース　アメリカ黒人の信仰と神学』新教出版社。
６．M・L・キング『自由への大いなる歩み　非暴力で闘った黒人たち』岩波新書。
７．E・F・フレイジア『アメリカの黒人教会』未来社。
８．末吉高明『黒人文化と黒人イエス』日本基督教団出版局。
９．栗林輝夫『現代神学の最前線　「バルト以後」の半世紀を読む』新教出版社。
10．宮平望『現代アメリカ神学思想　平和・人権・環境の理念』新教出版社。
11．Theodore Walker Jr., *Mothership Connections. A Black Atlantic Synthesis of Neoclassical Metaphysics and Black Theology,* State University of New York Press, 2004.
12．Cornel West, *Prophesy Deliverance!　An Afro-American Revolutionary Christianity*, Westminster John Knox Press, 1982.
, *The Cornel West Reade*r, Basic Civitas Books, 1999.
『人種の問題――アメリカ民主主義の機器と再生』新教出版社。
『民主主義の問題――帝国主義との闘いに勝つこと』法政大学出版局。